

「親になる」ことについての養母の心理的変容プロセス —複線径路・等至性モデル (TEM) による分析を通して—

森 和子*

本研究では、血縁によらない子どもを育てる養母がどのような心理的プロセスを経て血縁を超えた「親になる」経験をしていくのか、また養子特有の困難を伴うライフイベントの際の養母の抱える葛藤と、その解決に影響を及ぼした要因について複線径路・等至性モデル (TEM) を用いて質的に分析した。現在青年期の養子を幼少期から育てた4名の養母へのインタビューから作成したTEM図をもとに分析を行った。その結果、血縁によらない子どもを迎えるにあたり理想の子ども観をもって養子縁組をして「親になる」時期を過ごす段階があった。次に委託直後の〈試し行動〉から引き続き〈思春期の反抗・第2の試し行動〉で養母のもつ理想の子ども観と現実の子どもとの乖離から葛藤が生じ、養母の心理的価値の転換が起きていた。養母の理想の子ども像を手放すことで、生みの親の存在を含めたありのままの子どもの受容へと心理的変容が進み、養子とは血縁を超えて「親になる」ことに至ったことが示唆された。また、子どもを迎えた直後の〈試し行動〉の葛藤促進要因として、施設での体験からくるアタッチメントの問題が子どもの行動の背景にあり、解決要因として家族や近隣、養親・里親など生活圏内の人的資源が有効に機能していた。〈思春期の反抗・第2の試し行動〉の葛藤促進要因は、子どもの所属する学校からの注意であり、解決要因は生活圏外にある〈専門相談機関〉からの適切な助言を得て子どもの理解が進むことで「親になる」ことが発展的に変容していったことが明らかになった。

Key words : 養子縁組親子, 親になる, 心理的変容プロセス, 複線径路・等至性モデル

I. 問題と目的

1. 1 血縁によらない子どもの養育における課題

平成28年児童福祉法改正では、子どもが権利の主体であることが明確にされ、家庭養育優先の理念を規定し、実親による養育が困難であれば、特別養子縁組や里親による養育を推進することを示した。改正法の理念を具体化するために「新しい社会的養育ビジョン」(厚生労働省, 2017)をとりまとめ、特に就学前の子どもへの家庭養育を

実現できるよう、原則施設への新規措置入所を停止することとした。わが国の社会的養護のあり方が大きく家庭養護に転換されることとなった。里親制度と養子制度は、どちらも子どもを家庭へ迎え入れて養育する家庭養育であるが、里親制度は児童福祉法で規定された制度で、ある一定期間家庭での養育ができない子どもを養育する制度であるのに対し、養子制度は民法により養子縁組をすることにより法律上でも親子となる制度である。養子縁組制度は、1987年に普通養子と特別養子という2つ種類の制度となった。特別養子縁組

*人間学部人間福祉学科

は、保護者のない子どもや実親による養育が困難な子どもに温かい家庭を与えるとともに、その子どもの養育に法的安定性を与えることにより、恒久的に子どもの健全な育成を図るパーマネンシーを保障するしくみである。家庭養護への転換は児童の最善の利益の視点からは大きな前進といえるが、現実には養子縁組や里親委託された血縁によらない子どもの養育には様々な困難と課題や支援の必要性が指摘されている(岩崎, 2001; 金山・金山, 2006; 広瀬・岩立, 2011; 宮里・森本, 2012)。養子を迎えてからの課題として、最初の養育者である生みの親との別離を経験した上で施設生活を経てきた子どもが里親や養親の元で生活する時に本当に自分を受け入れてくれる人かどうか「試し行動」(家庭養護促進協会, 2007)を起こすことが実践現場から示されている。その後就学前の親子関係が落ちついてきた頃に「養子に対して、養子である事実を告げること。テリング(telling).」(子どもの人権大辞典, 1997)と言われる真実告知をすることと、その後の出自に関する様々なやりとり(古澤・富田・石井・塚田一城・横田, 2003; 森, 2005; 富田, 2010)を通して、子どもの生みの親の属性や誕生・親子分離の経緯についての情報を求めたり、生みの親との再会(reunion)を企図したりする(野辺, 2011)「ルーツ探し」が続いていく。生みの親に思いを巡らせつつ血縁によらない親子関係にまつわる葛藤の経験をしながらかつて養子としてのアイデンティティの形成とともに新たな親子関係を構築していくこと(Melina, 1986-1992; 家庭養護促進協会, 2007; 野辺, 2009; 森, 2017)が報告されている。そのためには養子には成長のライフステージごとに獲得しなければならない達成課題がある(Brodzinsky, D.M., Schechter, M. & Henig, R.M., 1993)ことが明らかにされている。養子の出自に関する疑問や思い、情報提供などのコミュニケーションがオープンにできる家庭であるほど、自らのアイデンティティに養子であることを統合する際の助けになっていることが示唆されている(Howe, & Feast, 2003; Farr, Grant-Marsney, Musante, Grotevant, & Wrobel, 2014)。今日、生みの親との別離を経験し、施設生活などを体験した子どもを

養子に迎えてから、生みの親がいることに起因する養子養育特有のライフイベントを踏まえた長期継続的な養育プロセスをとらえた質的研究は見当たらない。そのため、家庭内で発生する困難や出自に関する会話や対処などその際の養育者の心理的側面と支援も含めて探索する研究の蓄積が求められている。本研究では、血縁によらない子どもを育てる養母がどのような心理のプロセスを経て血縁を超えて「親になる」経験をしていくのか、また養子特有の困難を伴うライフイベントの際の葛藤とその解決に影響を及ぼした要因について明らかにすることを目的とする。

1. 2 本研究における血縁を超えて「親になる」の定義

本研究では、Kirk, (1964; 1988)の運命の分かち合い理論(Shared Fate Theory)に依拠して定義する。血縁を規範とする家族観を重視する社会でも、血縁によらない親子であることを認識した上で子どもを育てたい養親と、生みの親に育てられなかった養子それぞれの運命を分かち合って生活をする。家庭でも子どもの出自に関する話しをオープンにし、理解するコミュニケーション能力を持つことで親子の絆を築き、血縁によらない親も血縁を超えた「親になる」ことができることと定義する。

II. 方法

本研究ではデータ収集の導入としてのライフラインメソッドで得られた情報とライフラインを元に複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model: 以下 TEM)を用いてデータを分析した。

1. 1 データ収集の導入としてのライフラインメソッド

1回目の養母を対象とした調査では、生活におけるライフイベントとそれに対する思いを想起しやすくするツールとしてライフライン(河村, 2007)を用い、養子の成長に応じて出現したライフイベントとその際の養母の心情等について「嬉しい」と、「辛い」の方向で捉えた線を描いて

語ってもらった。「辛い」と示した時を養母の心理的葛藤の時とする。研究協力者に語られた経験を意味のまとまりごとに切片化し、イベントとしてラインに書き入れ、それぞれの内容を端的に表した見出しを付けた。

1. 2 データ分析方法としての複線径路・等至性モデル (TEM)

語りの分析にあたって用いる TEM は、ヴァルシナーが、発達心理学・文化心理学的な観点に等至性 (Equifinality) と複線径路 (Trajectory) の概念を取り入れようと草案したものである (安田・サトウ, 2017)。TEM は、人の発達や人生経路の多様性・複線性をとらえ描き出すのに適した質的研究法である (安田・サトウ, 2012) ことから、不妊治療を経て養子を迎えてから発生したライフイベントに対し、時間的変化と社会的・文化的背景を捨象せずに、養母の「親になる」心理的変容プロセスを明らかにしたいと考えた。分析においては、養子のライフイベントの経験を時間的経過に沿って並べ、多くの養母が経験したものを必須通過点 (Obligatory Passage Point:OPP) とし、様々な径路をたどりながらも類似した結果に至った体験を等至点 (Equifinality Point:EFP) として TEM 図に表した (図 2)。TEM 図には切片化したライフイベントと、必須通過点には OPP、分岐点には BFP とつけ四角の実線で囲んだ。養母の心情は楕円で、等至点は EFP とつけ二重線囲みの実線で示した。等至点の対となるような地点で現実には起こらなかったが等至点の補集合的な事象を両極化した等至点 (Polarized EFP:P-EFP) を設定し、二重線囲みの点線で示し分析に用いた。また、プロセスを促進する社会的ガイド (Social Guidance:SG) は等至点へ至るように働く力で、プロセスを阻害する社会的方向づけ (Social Direction:SD) は等至点から遠ざけようと働く環境要因や文化的な力を示すもので矢印で示した。ライフイベントを結ぶ実線の矢印は実際に聞き取られた径路で、論理的には存在すると考えられた径路は点線の矢印で示した。人の発達は質的に持続するため、非可逆的時間という非可逆性を示す時間概念を表した。

1. 3 データの分析手順

インタビュー調査の時間は 1 時間から 1 時間半程度で設定し、面接時の録音は研究協力者の承諾を得て行った。1 回目のデータ収集期間は 2017 年 3 月で、2 回目は 2018 年 3 月、3 回目は 2018 年 4 月から 8 月にかけて実施した。面接の場所は、協力者の希望に沿い、協力者の自宅や筆者の研究室など、安全面やプライバシーの保護が保障されるようにした。

1 回目の面接は、不妊治療を経て養子を迎えてから現在に至るまでのイベントを、研究協力者が認識している主観的に評定した値を 1 本の線でライフラインを描きながら想起してもらった。その後、1. これまでの養育を振り返って記憶に残るイベント、2. 出自に関するやりとりのイベントについて自由に語ってもらう半構造化面接を行った。2 回目の面接は、1 回目面接時に描写したライフラインを研究協力者に提示しながら、ライフイベント、養育のプロセスの要約を伝え修正や確認を取った。養育のプロセスの分岐点前後の状況と心理的側面に関する不足を補うために 2 回目の面接を行った。面接後 TEM 図の作成を行った。3 回目の面接は、TEM を用いてこれまでの語りを分析し作成した図を示し、ライフイベントの確認、イベントにおける心理的側面、社会的対処の修正補足情報を聴取し図の修正を行った。

2. 研究協力者

研究参加者の基準は、都市近郊にある Z 児童相談所から養子を受託した養親と養子の親子で、養子に真実告知を行っている家族から 4 名の養母を選定した。除外基準は、真実告知を行っておらず、今後も行う意思のない養親は除外した。3 組は養子縁組後、児童相談所の里親登録を辞退しているため、児童相談所の関わりはないものである。1 名は確認の上了承を得ている。真実告知を受けてから現在に至る時間の経過に伴う変化を見ていくために、複線径路・等値性モデル (TEM) を用いて分析した。標本規模を 4 名で実施した算定根拠としては、TEM を考案したサトウら (2012) はインタビュー対象者数として、 $1 \cdot 4 \cdot 9$ の法則として事例数を提唱している。1 ± 1 の場合より

4 ± 1 の場合は、経験の共通性と多様性を描くことができるという利点を生かし個々の事例における経験の類似性と相違点を描くために4組の親子を対象とした。

3. データ分析の信憑性

データ分析の信憑性を確保するために、発達心理学の専門家にデータの解釈について確認を得て検討を重ねた。

4. 倫理的配慮

研究協力者には、研究目的、意義、方法、研究協力の任意性と撤回の自由、不利益が生じないこと、守秘義務、個人情報の厳守について文書と口頭で説明し、同意を得たうえで同意書に署名を得た。個人情報が記載されているデータは特定されないよう匿名化を行い、記録媒体と共に鍵のかかる場所で厳重に保管した。面接内容を含めすべてのデータは本研究以外には使用せず、研究終了後破棄する。本研究は、2017年8月に名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理委員会にて、第17-1010として承認を受けたものである。

Ⅲ. 結果

養親の語りの中で説明が必要な箇所については（ ）内に意味が理解できるように筆者が補足的に加筆した。本稿は、倫理的配慮から調査協力者のプライバシーを守るため個人が特定されないようデータには若干の修正を加えてある。

1. 研究協力者の背景

研究協力者は、青年期の養子を持つ4名の養母である。対象とする養子は、4人とも20代後半から30歳である。家族構成は、1名は養父母と1名の養子であり、1名は養父母と養父母の実子の

兄の4人で、あとの2名は養父母と2名の養子から成り立っている。家庭に迎えた年齢は1歳6か月から2歳11か月で、最初の真実告知は3歳から6歳で行っており、養子縁組は4歳から6歳で成立している（表1）。養子にはA、B、C、Dと付け、養母にはAm、Bm、Cm、Dmとした。

2. 事例の概要

4名の養母への調査の導入としてライフラインを描いてから養育の時間的経過に沿って語られた内容の概要である。4組の養子のライフイベントと養母のライフラインは図1に示した。

(1) Amさん：自慢の息子が思春期になって問題行動を多発したケース

Amさんには不妊の目に合うことはとても辛く、夫とよく話し合い不妊治療に区切りをつけ、養親として子どもを育てることを決意し、1歳半の時にAを迎えた。家に来てからは物のまき散らしなどの試し行動はあったが養父に話してストレス解消した。真実告知は児童相談所から小さい時が良いと言われ3歳の時にして、5歳で特別養子縁組をした。その後生みの親のことは特に聞いてくることはなかった。小学校5年までは「頭はいい気がよく大きく自慢の息子」だった。小5の後半から問題行動が始まり、中学校でもよく問題を起こした。家ではAmさんと取っ組み合いの喧嘩をしては家出を繰り返した。児童相談所から少年鑑別所の一般相談を紹介され的確な助言をもらった。また昼夜逆転していて睡眠障害かもしれないと精神科を受診すると発達障害と診断され、これまでのAの不可解な言動が理解できた。県立高校を1年で退学し、通信制高校に転校して落ち着いた頃「この子に振り回されるのはもうやめよう」と、新たな親子関係に移行する転換となった。元いた乳児院が転移することを知り訪問を勧めると行ってきた。長い浪人生活を経て専門学校に進学

表1 研究協力者の背景

養母	養子	家族構成	年齢	職業	家庭に迎えた年齢	真実告知	養子縁組成立
Am氏	A氏	養父・A・妹（養子）	27歳	学生	1歳6か月	3歳	5歳
Bm氏	B氏	養父母・B・妹（養子）	29歳	会社員	2歳9か月	4歳	4歳
Cm氏	C氏	養父母・C	30歳	主婦	2歳11か月	5歳	6歳
Dm氏	D氏	養父母・兄（実子）・D	30歳	学生	2歳6か月	6歳	6歳

した。

(2) Bm さん：孫の誕生で養子の未知の時期を埋めたケース

Bm さんは夫が不妊症と分かったときはまだかと周りから言われたり、後から結婚した人に子どもが生まれどん底に落ち込んだ時に養子縁組里親を知った。B は、2 歳 9 か月で家に来て、試し行動もあり当初「イライラしてけっこうきつい言葉」を投げかけた。養親の自助グループや里親と出会う、「うちはそんなでもない大丈夫」だと思えた。4 歳で特別養子縁組が通って、「これで本当の親子になった、何が起きてても今なら言える」と思いすぐに真実告知をした。B は、「僕ここへきてよかったと思ってる。でも生んでくれた人ってどんな人が会ってみたいー」と言った時は、「普段すっかり養子であることを忘れてるのでとても悲しかった」と言う。中学生になって口をきかなくなり、親なんかいらぬといわれる。高校に入ってから部活に夢中でその頃から話をするようになった。家から離れ県外の専門学校進学も就職も

自分で決めた。25 歳で結婚して地元に戻ってきて再就職した。最近赤ちゃんが生まれ、養母は B では経験できなかったお腹にいる時や出産成長の様子を経験できると喜んでいる。

(3) Cm さん：子どもらしくない言動を否定して関係が悪化したケース

Cm さんは不妊治療の結果体調を崩して治療ができなくなった時、施設で育った子どもが家庭に入っても親の役割がわからないというテレビ番組を見て里親登録しようと思う。2 歳 11 か月で C を迎える。公園で遊んでいても、乗りたそうにしている子がいたらゆずるところがあり子どもらしくないのが気になった。しばらくして粗相を繰り返すようになった。近所の人に遊びに行ったり、幼稚園に行くようになって楽になった。6 歳の時に、特別養子縁組が成立した。小学校の担任から鉛筆の持ち方が悪い、整理整頓ができない等と言われて厳しくいうことが多くなり、C との信頼関係が悪くなる。悩んで教育相談を受けた時に、自分の判断基準で否定していたことに気づき、

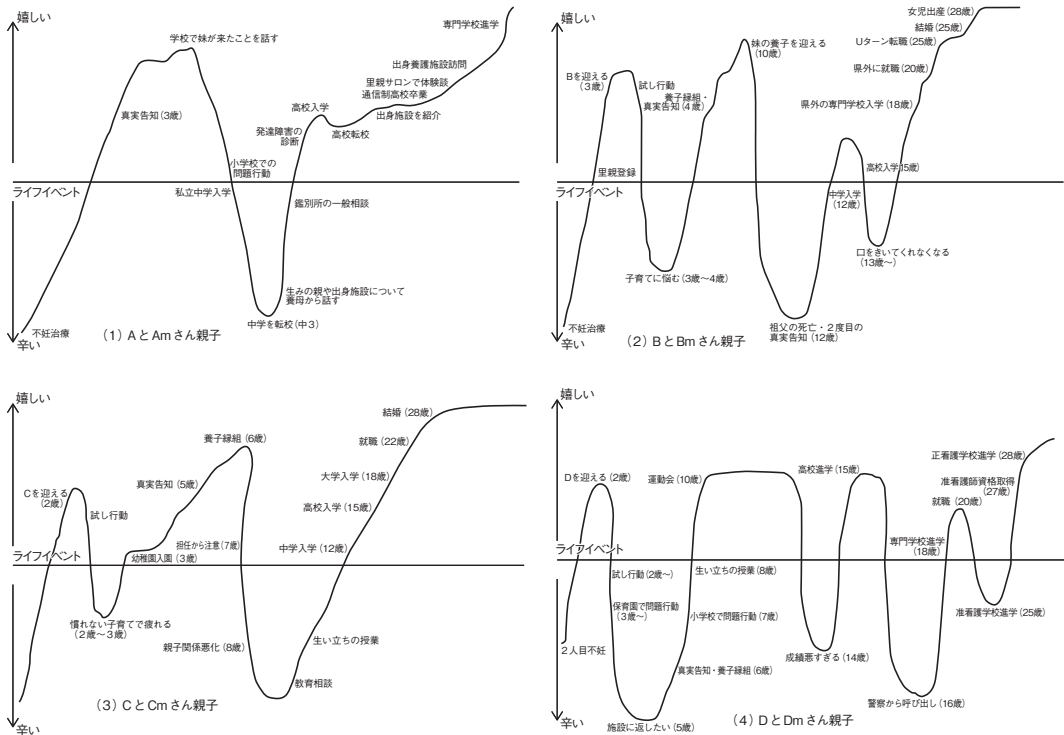


図1 養子のライフイベントと養母のライフライン

「今のままでいい」と受け入れる気持ちに変わった。生い立ちの授業では、「お母さんが二人いて得をした」と言う。Cは中学になって友達関係もよくなり、高校では部活で自分の力を発揮でき楽しく過ごす。「お母さんの名前、なんていうのかな？」とフツと言ってきてドキッとすることがあったが普通に話をした。今年結婚して家を出たが、養父が病気になってからは介護のために帰ってきてくれている。

(4) Dmさん：施設に返そうかと思ったほど試し行動が激しかったケース

養親は実子が一人いるが、兄弟を作ってあげたいと思って養親になった。Dmさんのもともと来てから過食偏食もひどく保育園でも他の子どもにけがをさせたりして問題児と言われるようになった。「もうこの子は施設へ返そう」と思い家族に言うと、実子から反対され思いとどまり養子縁組をした。運動会で「小柄な体でリレーの選手に選ばれて一生懸命頑張っている」のを見て涙が出た。

学校の保護者会には必ず月一回行って顔を覚えてもらうようにし、「何かあったら言ってください」と話した。「背がのびないのは親のせいだ」と言ったが、ルーツが悪いことを言うてはいけないと考えている。中学3年生でこのままでは入れる高校がないと言われたが、県立高校の体育コースに入ることができた。卒業後専門学校に行って資格を取り、5年働いてから准看護学校に行った。今は正看護学校に行っているが、まだ心配はある。

3. TEMによる分析

分析結果を記述する上で、切片化されたライフイベントや経験、必須通過点OPP、分岐点BFP、等至点EFPの記号を〈 〉で括り、発言の見出しは「 」で示す。個人がそれぞれ多様な経路をたどったとしても、等しく到達するポイントが等至点という考え方に基づいて、研究テーマに照らして等至点を〈血縁を超えて「親になる」(EFP)〉とし(表7)、それまでのプロセスにつ

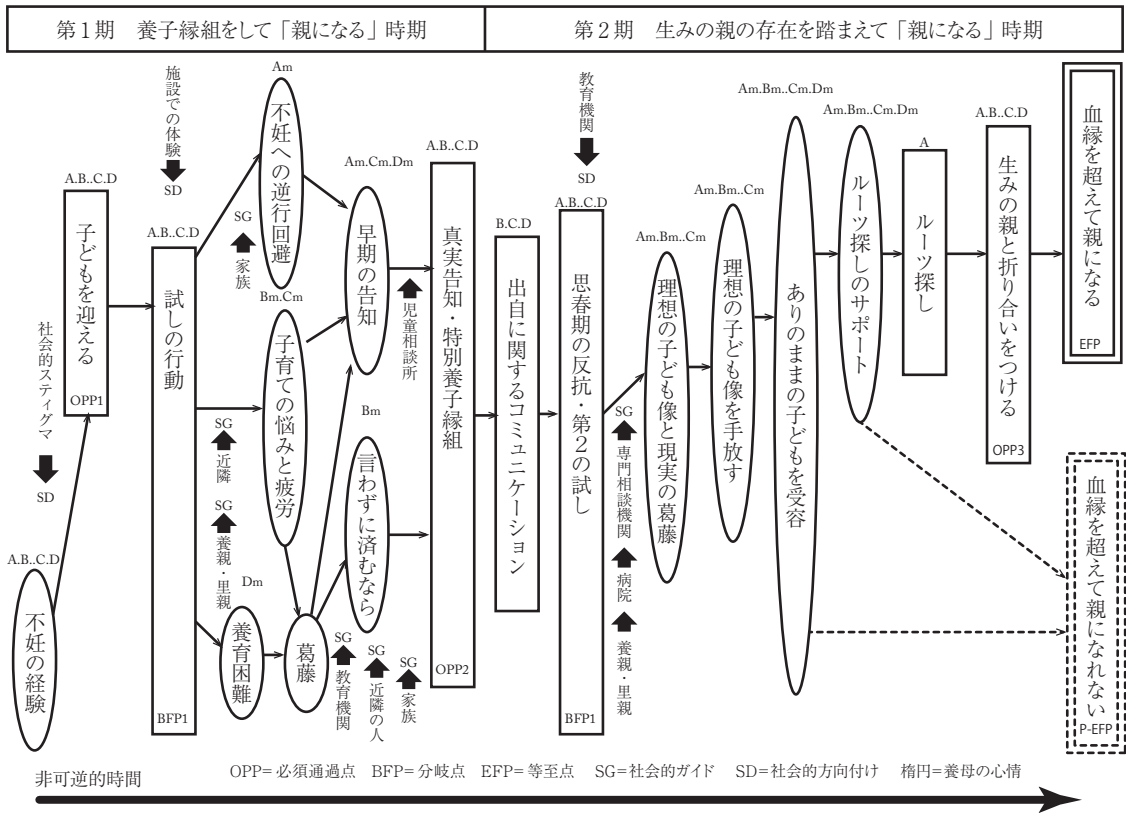


図2 養子が青年期になるまでのプロセスと養母の心理的変遷

いてTEM図を用いて可視化した(図2)。不妊治療を経て〈子どもを迎える(OPP1)〉ことから養育は始まり〈真実告知・特別養子縁組〉までを【第1期 養子縁組をして「親になる」時期】とし、〈出自に関するコミュニケーション〉から〈血縁を超えて親になる(EFP)〉までを【第2期 生みの親の存在を踏まえて「親になる」時期】の2期に分けた。等至点に向けて、ライフイベントの時間の流れに沿って、ほとんどの養母がたどった径路を必須通過点として、〈子どもを迎える〉(表2)、〈真実告知・養子縁組〉(表4)、〈生みの親との折り合い〉(表6)とした。そして分岐点として、〈試し行動〉(表3)、〈思春期の反抗・第2の試し行動〉(表5)と設定し養母の発言を表にまとめた。ここから読み取れる養子養育の際の重要な養母の心理的転換となった体験を以下で示す。

3-1 【第1期 養子縁組をして「親になる」時期】のプロセス

養子を迎えるところからライフイベントが始まったが、4人全員の養母からその前の不妊治療や体験の辛さが語られた。苦しみの先に見えたものは血縁による子どもを持つことを諦めても子どもを育てたいと、全員が血縁によらない〈子どもを迎える(OPP1)〉選択をしているため必須通過点と設定した(表2)。「不妊治療からの脱却」「不妊の悲しみからの転換」と不妊経験の辛かったことが子育てをする上でも影響を与えていた。二人目不妊のDmさんは「実子に弟ができた喜び」を語り、Cmさんからは「育てることの嬉しさと不安」と嬉しいだけではなく養母の知らない過去をもつ子どもの養育に複雑な思いも示されている。

子どもを迎えてから数か月間から1年位全員が養子の〈試し行動(BFP1)〉を経験しており、3人はその時期が辛いと認識して、「不妊治療への

表2 〈子どもを迎える〉に関する養母の発言と見出し

必須通過点	養母	見出し	発言
子どもを迎える	Am	不妊治療からの脱却	里親として子どもを育てられることになった時は地獄に落ちてやっと捕まえた蜘蛛の糸のようだったですね。
	Bm	不妊の悲しみからの転換	Bが(里親登録して)約半年で来たときはあんだけ悲しかったのにこんなに幸せって人生変わったと思いました。
	Cm	育てることの嬉しさと不安	家に来た時は嬉しさとこれからどうやって関わっていったらよいかという不安と半々でしたね。
	Dm	実子に弟ができた喜び	2歳の可愛い盛りに来てくれ近所にも「こんど家の子になります」と挨拶に行くと、実子も一人っ子で弟ができたって喜んでました。

表3 〈試し行動〉に関する養母の発言と見出し

分岐点	養母	見出し	発言
試し行動	Am	不妊治療への逆行の回避	物をまき散らしたりなど試し行動をしていた時もこれで諦めてまた不妊治療に戻ることを考えたら、その日にあった大変なことを夫に話してストレスを解消してました。
	Bm	子育ての悩み	子どもが来た当初イライラしてけっこうきつい言葉を投げかけて・・・養親の自助グループや里親と出会って、うちはそんなでもない大丈夫だと思えたんです。
	Cm	慣れない子育ての疲労	しばらくして粗相を繰り返すようになって、3歳6か月くらいまで慣れない子育てで疲れた時は、近所のお子さんのいる家遊びに行かせてもらったり、幼稚園に行くようになって体を休めることができて楽になりました。
	Dm	問題行動による養育困難	クラスの女の子の顔に傷をつけた時、土下座して謝ったんだよね、自分で(養子を迎えることを)選んだ道だけど、いやだ、耐えられないって。11歳の長男は「僕が同じことをしたらどこに返すんだよ」って言った時、預かっている気持ちがあるからそう思うんだ、Dは実親から捨てられて、今返したら2回傷つけることになるって思って。

逆行の回避」「子育ての悩みと疲労」「養育困難」という選択肢に分かれたため最初の分岐点とした（表3）。子どもたちが示す〈試し行動〉を引き起こす要因として〈施設での体験；SD〉が背景にある。Bmさん、Cmさんも慣れない育児に心身ともに疲労していたが〈近隣の人（SG）〉や〈幼稚園（SG）〉、〈養親、里親（SG）〉からの社会的助勢で得て乗り越えている。しかし、Dmさんにとっては施設に帰そうと思ひ詰めるほどの葛藤要因となったが、〈家族（SG）〉が支えとなった。一方Amさんは、〈試し行動（BFP1）〉はあったが不妊治療に戻りたくない強い思いと、帰宅の早かった夫〈家族（SG）〉に話して発散し前に向けて進んでいくことができた。

〈真実告知・養子縁組（OPP2）〉は、逡巡はあったが4人の養母全員真実告知をしている（表4）。早期に真実告知をすることを〈児童相談所〉から助言されていたこともあり、3人の養母は時期を定めて告知をしているが、Bmさんは何の疑いもなく親と信じきっている子どもに養子であることを伝えることに辛さを感じ、できることなら言いたくないという思いを引きずっていた。しかし、特別養子縁組が成立して法的にも親子になったため、これで何も怖いことはないと告知している。真実告知によって「養母から生まれたい願望」を口にするとAや2人母がいて嬉しいと抱きついて

きたCのように受け取り方も様々であった。

3-2 【第2期生みの親の存在を踏まえて「親になる」時期】のプロセス

真実告知で生みの親の存在を伝えることによって、その後に出自に関するコミュニケーションが時々あったことが3人の養母から語られた。Aは特に聞いてくることはなかったということである。3人からは名前やどこにいるのか、また遺伝的なことでの怒りなど思いがけない時にフツと聞いていることが語られた。Bmさんは普段はBが養子であることを忘れていたため、少しでも生みの親のことがBの中にあるのかと思うと悲しみを感じるという。

そして、〈思春期の反抗・第2の試し行動（BFP2）〉はすべての養親が経験し、そこから親子関係が断絶に至りそうな葛藤の選択肢も発生していることから分岐点とした（表5）。この時期のことをAmさんは第2の試し行動といていた。トラブルを促進するきっかけは学校などの〈教育機関からの注意（SD）〉で始まるが多かった。子どもを迎えた後の試し行動が特になかったAmさんと慣れない子育てでの疲労感の解消のための助けを得ることで乗り越えたCmさんは、思春期で親としての激しい揺さぶりをかけられる。Amさんは「養子を選択したことの後悔」が

表4 〈真実告知・養子縁組〉に関する養母の発言と見出し

必須通過点	養母	見出し	発言
真実告知・養子縁組	Am	養母から生まれたい願望	3歳の時旅行先で、「神様が間違えちゃったんだよ」とおとぎ話的に真実告知を話したんですね。Kは抱きついてきて「僕はもう一度お母さんのお腹から生まれたい」って、はしゃいでいたのがしみりして涙を浮かべ抱っこして離れなかったですね。
	Bm	法律上でも親子になった自信	特別養子縁組が通って、これで本当の親子になった、何が起きても今なら言えると思い、すぐに『真実告知』をしました。本を読みながら「お母さんのお腹がこわれちゃったから・・・」と話しました。
	Cm	スティグマから養子を守護	近所の人にも知っているしどこかから話が入ることもあるかもしれないから話した方が良くって、赤ちゃんを生めない体である事、とっても子どもが欲しかったのであなたをもらった事、生んでくれたお母さんもいるけれど、今ここにいるのが本当のお母さんであることを話しました
	Dm	早期の告知と自己肯定感の醸成	真実告知については児童相談所の研修で思春期にだまされたと感じるかもしれないから早くした方がよいと聞いていたので「Dを生んでくれたお母さんは別の人だけど今はお母さんがDのお母さんだから、お腹から出てきた子じゃないけど心から出たんだよ」と入学直前に話したんです。

現れ、Aが20歳になったら親子関係が解消できるからと生みの親の名前を教えている。その後、鑑別所や教育相談、精神科などの〈専門相談機(SG)〉に繋がることで適切な社会的助勢を受け乗り越えている。Cmさんは他の子どもと比べて自分の基準でCを否定して親子関係が悪くなり、教育相談や子育ての本を読むことで「理想の子ども像を手放す」経験をしてありのままのCを受け入れることを決意している。一方委託直後の〈試し行動(BFP1)〉の時期にとっても辛い状態に陥ったBmさんは、「親としての自信喪失と悲哀」を感じて他の〈養親や里親(SC)〉からの話を聞いて慰められている。Dmさんは「家族と周囲の人の理解と見守り」によってこの時期を乗り越えている。

血縁によらない親子であることを踏まえて、真実告知と出自に関するコミュニケーションを交わしながら全員の養母が思春期を過ぎた養子に〈ルーツ探しのサポート〉を申しでて、養子と生みの親との関係を取次ぐ橋渡しの役目を担おうとしていた。実際に生みの親に会った養子はいなかったが、Aだけ生まれてすぐに入所した乳児院を訪問している。その後全員が〈生みの親との折り合い〉をつけているため必須通過点とした。養子の成長に伴い、「生みの親への配慮」ができるようになり、成長して生みの親に「会う意味の喪失」や、「時間の経過による折り合い」、また家族からも「生みの親の肯定的理解」が示されている。

〈思春期の反抗・第2の試し行動(BFP2)〉により親子関係を大きく揺さぶられる経験を経て、全ての養母が育ての親として生みの親を知りたいならと〈ルーツ探しのサポート〉を行っているため、〈生みの親の存在を踏まえて「親になる」(EFP)〉を等至点とする(表5)。「孫の誕生で未知の養子の乳幼児時代を追体験」できる喜びを語るBmさん、結婚式で皆の前で「養子であることを堂々と開示」したCさん、「生みの親を含めたDの存在の受容」する姿勢を貫くDmさん、AmさんはA家の教育方針や子ども親に従って過ごしてきただけで、今は血が繋がっていないことを確認した上で「新たな親子関係の開始」を感じ〈生みの親の存在を踏まえて「親になる」(EFP)〉ことに関する言及があった。

IV. 考察

本研究では、血縁によらない子どもを育てる養母がどのような心理的プロセスを経て血縁を超えた「親になる」経験をしていくのか、また養子特有の困難を伴うライフイベントの際の養母の抱える葛藤とその解決に影響を及ぼした要因について検討した。その結果、養母の語りからTEM図により、子育ての前半は血縁のない親と子どもが法律上の「親になる」ことで、【第1期 養子縁組をして「親になる」時期】のプロセスを進み、その後は真実告知から始まる出自に関するコミュニ

表5 〈思春期の反抗・第2の試し行動〉に関する養母の発言と見出し

分岐点	養母	見出し	発言
思春期の反抗・第2の 試し行動	Am	養子を選択したことの後悔	やっぱり自分の子じゃないし、養子にするんじゃないかと思ったこともあって、ケンカしては家出を繰り返していた時に、この子はもうここにいたくないのかもしれないと思って、20歳になったら特別養子縁組でも親子関係が切れるからって元(生みの親)の名前を教えたんですね。
	Bm	親としての自信喪失と悲哀	中学になって口をきいてくれなかったり、親なんかいらなるといわれると悲しくなりました。
	Cm	理想の子ども像を手放す	子どもはこうあるべきと欠点を見つけるとだめだってどんどん責めて厳しくいうことが多くなって、信頼関係が悪くなりました。悩んで教育相談を受けたり育児書を読んだりして、ありのままのCを受け入れようと思いました。
	Dm	家族と周囲の人の理解と見守り	学校の保護者会には必ず月一回行って顔を覚えてもらうようにして、何かあったら言ってくださいって話してた。高2の時万引きをした時、長男が助けてくれた。「兄ちゃんって俺の味方だなんて思った」って言ってました。

ケーションを交わしていくことで【第2期生みの親の存在を踏まえて「親になる」時期】のプロセスが示された。以下で養母の「親になる」心理的変容プロセスと養母の抱える葛藤とその解決に影響を及ぼした要因について考察する。

1. 養母が「親になる」経験の心理的変容プロセス

TEMによりプロセスの可視化を通じて捉えた分岐点からは、そこで何が起きているかという発生を捉える視点が導き出される。TEMから発展した発生の三層構造モデル（Three Layers Model of Genesis：TLMG）は分岐点における内的変容過程をとらえるのに有用である（安田・サトウ、2017）ことからモデルに沿って考察を進めたい。

〈子どもを迎え（OPP1）〉〈試し行動（BFP1）〉〈思春期の反抗・第2の試し行動（BFP2）〉を経て、〈生みの親を踏まえた「親になる」（EFP）〉までの養母の「親になる」心理的変容プロセス全体を価値変容経験として発生の三層構造モデル（TLMG）で可視化したのが図3である。血縁を超えた「親になる」プロセスは、さまざまな人生経路があり、多様な道のりがあった。第1層の行動が発生する個人活動レベルでは、養母が不妊により血縁の子どもが産めなかった辛さから脱却して、血縁によらない子どもを育てるという選択をすることから始まる。長期に渡る不妊治療中の周囲の期待やプレッシャー、成果が出ない閉そく感、先に妊娠していく人たちを見る苦しさや年齢的な限界などが大きなストレスになることが語られている。

表6 〈生みの親との折り合い〉に関する養母の発言と見出し

必須通過点	養母	見出し	発言
生みの親との折り合い	Am	生みの親への配慮	「生んだお母さんに会いたいなら段取りするから」って何度か言ったんだけど、顔似てるかなくらいで会いたいとは思うけど。向こうも急に来られてもこまるでしょ。別にいいんじゃない。お父さんとお母さんはいるしね。」
	Bm	会う意味の喪失	その人に会ってみたい?」って言ったら「今さら会っても今の俺の報告をするだけだから」って言ってました。
	Cm	時間の経過による折り合い	どんな人なのかということは言うんだけど・・最近では会いたとも言わないし、ふっさきれちゃったみたいですね。
	Dm	生みの親の肯定的理解	お母さんに会ってみたいくないのって聞いたら「全然。なんで今更会いに行くの」って、捨て子とか殺したニュースを見た時、「そんなら生まなきゃよかったのに」って言うから「Dのお母さんは預けてくれて良かったね」っていったら「まあな」って。

表7 〈生みの親の存在を踏まえて「親になる」〉に関する養母の発言と見出し

等至点	養母	見出し	発言
生みの親の存在を踏まえて「親になる」	Am	新たな親子関係の開始	はじめ家に来たときはA家の教育方針や子ども観に従って過ごしてきただけで、小学校高学年から第2の試し行動が始まってKの自分探しを始めたんだと思います。血がつながっていないことを確認した上ではじめと違った親になりました。
	Bm	孫の誕生で未知の養子の乳幼児時代を体験	パパになります！毎回感動で涙、涙です。私も密かにBそっくりの男の子だったら…と思っています。なぜなら、赤ちゃん時代知らないの…垣間見ることができたらなあなんて思ってます。
	Cm	養子であることを堂々と開示	子どももきたから成長したし、社会とも深くかかわれるようになって視野が開けましたね。結婚式の時のスピーチで、育ててくれてありがとうとみんながわかるように言って、最後に「お母さん大好きです」って言ってくれたんです。
	Dm	生みの親を含めたDの存在の受容	「俺の悪い気持ちは生んだ親に似てるんだろうな」と言ったから「育てたのはお母さんだしDが自分に負けたんじゃない。」って、ルーツが悪いことを言うてはいけなと思っています。

不妊経験での社会的スティグマを受けた女性がその経験を問い直すことを通じて、マイナスとされていた不妊という経験はいわば、血のつながりのない子どもと共に築く親子関係への開眼、産むことができない身体を持つ自分自身の受け入れ（安田，2005）をしていくことは、この時点での養母の心情とも一致している。養母たちは、子どもを迎えるまでにそれぞれ理想の子ども像や教育観をもって良い子に育てなければと子育てを始めている。〈試し行動〉が落ち着いてくる就学前後は、養子であることを忘れてしまうような時期で、**【第1期 養子縁組をして「親になる」時期】**を迎えている（第1層：個人活動レベル）。BmさんとDmさんは委託直後に始まった〈試し行動〉で、AmさんとCmさんは〈思春期の反抗・第2の試し行動〉で養母のもつ理想の子ども観と現実の子どもの実態の乖離による葛藤から、「養育困難」に陥り〈施設に帰そう〉と思ったり「養子にしたことの後悔」と大きな葛藤を抱えたことが心理的変容を促進したと思われる。これらの養母に葛藤を起こさせた分岐点となった2つの〈試し行動〉が、サインとなって養母の心理的価値の転換を引き起こしたと考えられる（第2層：記号レベル）。養親に血縁親子規範が意識化されるのは、親子関係が悪化した時（野辺，2009）という知見にあるように養母が追い詰められた時の心情と一致している。葛藤による事態の收拾をするために子どもを変えるのではなく、養母の抱いていた理想の子ども像を手放すという方策が獲得された場合は、本来の子どもの姿が立ち上がり「ありのままの子どもの受容」という心情の変化がもたらされ次のレベル（第3層：信念・価値レベル）へと変容が起きたことが示唆された。具体的には、ありのままの子どもに欠かせない存在として生みの親として、養母全員が養子に〈ルーツ探しのサポート〉を申し出るような変容が起きている。養子特有のイベントである〈ルーツ探し〉では、Aのみが乳児院を訪問しているが、その後は他の3人も含め〈生みの親に折り合いをつける〉ことに繋がった。出生を探求する養子は、探究しない養子

に比べ、家族に対して不満をもつ頻度が優位に高かった（Hoops, 1990）という研究結果があるように、全員の養子にとって親子関係の満足度が高いことから生みの親をさがしたり再会を望むことに繋がらなかったことが推察される。〈**【真実告知】**〉の時は、養母からは生めなかった事情や思いに重きが置かれていたが、思春期以降徐々に生みの親の情報を提供する出自に関するコミュニケーションへとシフトしていった。成長とともに現実の生み親をイメージし理解する力も発達したことにより養子全員が〈生みの親との折り合い〉をつけることができたのではないかと思われる。養父母が生みの親の情報を子どもに提供することが「養子である子どもや青年に対して最も肯定的な成果をもたらす」（Kroger, 2000=2005）という知見から、養母が〈ありのままの子どもを受容〉できず、生みの親への情報提供がなく〈ルーツ探しのサポート〉もなされない場合は、養子とは〈血縁を超えた親になれない（P-EFP）〉ことに繋がるのが推測される。実親の情報や交流はないが、家族間での出自に関する会話が重要なサポートになり、養子のアイデンティティの発達に結びついていく（Korff, & Grotevant, 2011）という研究結果にもあるように、Kirk, (1964, 1984) の指摘する家庭でも子どもの出自に関する話しをオープンにし、生みの親の存在も含めて互いに理解するコミュニケーション能力を持つことで運命を分かち合いながら、養母たちは血縁を超えて「親になる」心情に変容していくプロセスが示されたと考える。

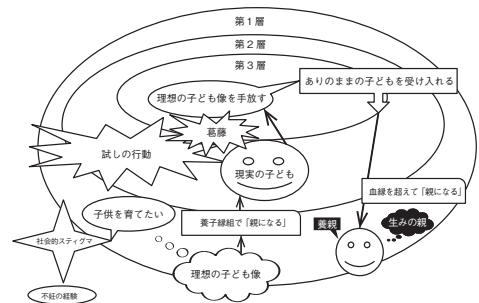


図3 養母が「親になる」心理的変容

2. 養母の抱える葛藤の解決要因と促進要因

養母の抱えた葛藤は〈試し行動〉と〈思春期の反抗・第2の試し行動〉の分岐点で生じていた。養母の抱えていた理想の子どもと現実の子どもとの乖離が葛藤の促進要因としてあげられる。養子を迎えた後の〈試し行動〉では、養子が暮らしていた施設での体験によるアタッチメント（Bowlby, J., 1979）の問題が背景にあることが指摘されている。子どもがアタッチメントを形成するためには

1. 身体的ケアと情緒的ケアが与えられること、
2. それが連続かつ一貫して応答されること、
3. 養育者の子どもに対する思い入れがあることが必要要件となる。

近年の研究では1対1の子育ては幻想で、本来人間は協働繁殖であり複数の養育者がそれぞれで3つの要件を提供することで子どものアタッチメント形成が進むもの（増沢, 2017）と説明している。養母は養育を家庭内だけで解決するのではなく養子が幼少期には〈近隣の人〉や〈幼稚園〉、〈養親、里親〉〈家族〉という生活圏に近い環境資源のサポートが解決要因として有効に機能していたことがわかった。保育園やその他の子育て支援機関も含め、子どもが複数の養育者との間でアタッチメントが形成され、アタッチメント対象同士で子供の養育を補い合えるネットワーク型の養育環境を用意することが求められる（増沢, 2017）という指摘とも一致している。成長につれて思春期に近づくと学校などの〈教育機関からの注意〉などが葛藤の促進要因として挙げられた。社会生活をする上で、学校は子どもの生活にとって大きな部分を占めるとともに、養母にとって理想の子ども像を維持するためには学校での評価は重要なものとなる。そのため負の評価を受けた時は養子に注意を与えることが増え、子どもも反発し対立関係が生じる。この時期は、鑑別所や教育相談、精神科などの生活圏外の〈専門相談機関〉に繋がり適切な助言を受けたことが解決要因となっていることが示された。

また、養子養育特有の課題としての葛藤は、〈真実告知〉と〈ルーツ探し〉があげられる。〈真実告知〉は児童相談所からの委託直後研修での指導があったことで全員が早期に行っている。養親から子どもに対し、生みの親ではなく育ての親である事実

を告げることで終わるのではなく、子どもは成長するにつれ自分の生い立ちに新たな疑問を抱くようになるため、その子どもの理解の度合いに応じて情報を伝えていくことが必要となると言われている（Lois, 1986=1992; Keefer, & Schooler, 2000; 家庭養護促進協会, 2004）。〈真実告知〉をしてからの家庭内で養子の出自に関する会話がオープンにできるコミュニケーションが行われることが養子の健康的なアイデンティティの形成に影響するという親の態度や家庭環境の重要性も多くの研究で検証されてきた（Grotevant et al., 1994; Hoops, 1990; Tovah, 1996）。実際には無心に慕ってくる子どもに「できることなら言いたくない」という心情やいつ「言おうか逡巡してやっと言えた」という声があったように、〈真実告知〉や〈ルーツ探し〉が将来に向けて養子のアイデンティティの形成のために重要であることを養母が理解していることが葛藤を解決する要因となることが推察される。その後の〈ルーツ探し〉は、養子に対する理解が進むことで養母の心理的変容が起り〈ありのままの子どもの受容〉に至って、生みの親を尊重するコミュニケーションが積み重ねられ、養子との葛藤も消失し「親になる」ことが発展的に変容していったことがわかった。

3. 本研究の意義と今後の課題

本研究の意義として、3点挙げる。1点目は、血縁によらない子どもを養育する養母が、理想の子どもと現実の子どもとの葛藤を経て、理想を手放していく段階を踏むことで、〈真実告知〉から始まり生みの親に関するコミュニケーションを通して血縁を超えて「親になる」変容プロセスを示したことである。2点目は、養子養育の多くが子どもを家庭に迎えてからと思春期の2回の試し行動による葛藤が発生することと、それぞれの促進要因と解決要因を明らかにしたことである。3点目として、養母の不妊経験がその後の子育てにも影響を与えていることを見出したことである。本研究では、子どもを迎えてからの葛藤に直面した時に、本当に子どもが育てたいと覚悟を決めたことで不妊経験の辛さをバネにして養育を進めていたことが示された。

今後の課題として、養子養育の困難な出来事や時期、乗り越える方策などを一般化するためには事例を増やし様々な特性のあるライフイベントを示す家族を調査対象にすることで今回の研究の限界を解決する必要がある。それとともに今後も本研究協力者の養親子を対象に、継続して成年期以降の追跡調査をすることも意義があると考え。血縁によらない親子の不調ケースは決して少なくない現状を鑑みて、今後さらに増加する養子縁組家族に問題が発生した時に対応できるエビデンスに基づいたサポート体制の検討も喫緊の課題であると考え。

引用文献

- Bowlby, J. (1979). *The Making & Breaking of Affectional Bonds*, Tavistock Publications Limited= 作田勉監訳. ポウルビー母子関係入門. 星和書店 1984.
- Brodzinsky, D.M., Schechter, M. & Henig, R.M. (1993). *Being adopted-The Lifelong Search for Self*. Anchor Books, New York.
- Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and Crisis*. W.W. Norton & Co., Inc.= 岩瀬庸理訳 (1973). アイデンティティ青年と危機. 金沢文庫.
- Farr, H. R.H., Grant-Marsney, A., Musante, D.S., Grotevant, H.D. & Wrobel, G.M. (2014). Adoptees' Contact With Birth Relatives in Emerging Adulthood, *Journal of Adolescent Research*, 29(1), 45-66.
- 広瀬あや・岩立志津雄 (2011). 里親の養育態度が里子の生活に対する充実感や自己受容、いらだち等に与える影響. *家族心理学研究* 第 25 巻第 2 号, 160-173.
- Hoops, J.L. (1990). *Adoption and Identity Formation, The Psychology of Adoption*, Oxford University Press, 144-166.
- Howe, D. and Feast, J. (2003). *Adoption Search and Reunion: The Longterm. Experience of Adopted Adults*, London: BAAF.
- 市川昭午, 永井憲一監修 (1997). *子どもの人権辞典*. エムティ出版.
- 岩崎美枝子 (2001). 児童福祉としての養子制度—家庭養護促進協会からみた斡旋問題の実情—, *養子と里親—日本・外国の未成年養子制度と斡旋問題—* 養子と里親を考える会編, 湯沢雅彦監修, 日本加除出版, 57-79.
- 金山佐喜子, 金山元春 (2006) *臨床心理学からみた里親養育『心理臨床学研究』* 第 24 巻第 5 号, 601-605.
- 家庭養護促進協会 (1998). *血のつながりを越えて親子になる* 家庭養護促進協会大阪事務所
- 家庭養護促進協会 (2007). *真実告知ハンドブック* 家庭養護促進協会神戸事務所.
- 河村茂雄 (2007) 『*ライフラインとは. 心のライフライン*. 第 5 版, 誠信書房.
- Kirk, H.D., (1964). *Shared Fate: A Theory of Adoption and Mental Health*, New York, the free Press of Glencoe.
- Kirk, H.D. (1988). *Exploring Adoptive Family Life The collected Adoption Papers of H. David Kirk*, Ben-Simon Publications.
- Korff, L.V. & Grotevant, H.D. (2011). Contact in Adoption and Adoptive Identity Formation: The Mediating Role of Family Conversation, *Journal of Family Psychology*, 25(3), 393-401.
- 古澤頼雄, 富田康子, 石井富美子, 塚田・城みちる, 横田和子 (2003). 非血縁家族における若年養子へのテリング—育ての親はどのように試みているか? *中京大学心理学研究科・心理学部紀要*, 3(1), 1-6.
- 厚生労働省 (2017) 「新しい社会的養育ビジョン」 <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000173868.html> (2018 年 8 月 20 日)
- Kroger, J. (2000). *Identity Development; Adolescence through Adulthood*. Sage Publication, Inc.= 榎本博明編訳 (2005). *アイデンティティの発達—青年期から成人期—*. 北大路書房.
- 増沢高 (2017). *里親・養子縁組におけるアタッチメント* 子どものための里親委託・養子縁組支援, 明石書店, 25-36.
- Melina, L.R. 1986=1992. *Raising Adopted Children*, Harper & Row Publishers, Inc. (= 伊坂青司・岩崎曉男訳, 1992. 『子どもを迎える人の本—養親のための手引き』 どうぶつ社).
- 宮里慶子・森本美絵 (2012). 養子縁組里親, 養親の抱える困難とその対処—里親支援枠組みからの離脱とスティグマ, *千里金蘭大学紀要* 9 号,

1-12.

- 森和子 (2005). 養親子における「真実告知」に関する一考察—養子は自分の境遇をどのように理解していくのか—. 文京学院大学人間学部紀要, 7 (1), 61-88.
- 森和子 (2017). 血縁によらない親子関係の再構築—真実告知後の養子と養母のやりとりの記録から—家族心理学研究, 30(2), 134-148.
- 野辺陽子 (2009). 養子縁組した子供の問題経験と対処戦略—養子の実践と血縁親子規範に関する一考察—. 家庭教育研究所紀要. No. 31. 88-97.
- 野辺陽子 (2011). 実親の存在をめぐる養子のアイデンティティ管理. 年報社会学論集, 24, 168-179.
- 富田康子 (2010). 育て親家族におけるテリングの効果についての探索的検討 鎌倉女子大学紀要, 18, 27-38.
- 安田裕子・サトウタツヤ編著 (2012). TEMでわかる人生の径路 質的研究の新展開, 誠真書房.
- 安田裕子・サトウタツヤ編著 (2017). TEMでひろがる社会実装—ライフの充実を支援する, 誠真書房.
- 安田裕子 (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程—治療では子どもを授からなかった当事者の選択岐路から—, 質的心理学研究第4号, 201-226.

謝辞

本論文の作成に際しては、事例の公表をご快諾くださったご家族に心より感謝申し上げます。名古屋大学の平石賢二先生、立命館大学の安田裕子先生より貴重なご助言をいただきました。厚く感謝申し上げます。

また、本研究は科学研究費補助金（基礎研究 C「青年養子の成長発達プロセスの横断研究と「ルーツ探し」システムの構築」課題番号 18K02114(研究代表者森和子) の助成を受けて行われた研究の一部です。

(2018. 9. 24 受稿, 2018. 10. 31 受理)